

テオクリトスからウエルギリウスへ

(牧歌の誕生)

八木橋 正雄

1. 序

テオクリトスの作品は *εἰδύλλιον* の名で呼ばれる。三十編からなり、愛の歌（第 12、28、29、30）、ミーモス（第 15）、神話叙事詩（第 13、25、27）、仮想空想的愛の詩（第 2、3、11）、ヘレネーの婚礼歌（第 18）、ヒエローン頌歌（第 16）、プトレマイオス 2 世頌歌（第 17）を含む牧歌（BUCOLICA）群である。

ギリシアの實在の背景のもとに、叙事詩と神話の枠組のなかに、牧人の生活と純粋な恋と自然との調和を描いた作品である。

技巧的な当時の詩風にあつて、生色、純粹さがその特筆すべき点である。のちウエルギリウスはこれを模倣しながら、暗喩的抽象的になり純化した。

本論では、その原典を比較し、牧歌の創造の原点に立ち返ることをその目的とする。

原典対照

第 1 歌冒頭：ΘΕΟΚΡΙΤΙΥ ΘΥΡΣΙΣ Η ΩΙΔΗ

ΘΥΡΣΙΣ

Ἄδύ τι τὸ ψιθύρισμα καὶ ἄ πίτυς, αἰπόλε, τήνα,
ἄ ποτὶ ταῖς παραῖσι, μελίσδεταί, ἄδὸ δὲ καὶ τύ
συρίδες· μετὰ Πάνα τὸ δεύτερον ἄθλον ἀποισῆ. (1→3)

山羊の守りなる君

そして この松の木陰

夫（そ）こそ泉のかたへ

えも知らず、かろき さざめき

お歌くださいませ
葦笛の歌で
パーン神につづいて
かち得ましょう比肩の誉れを。

ΑΙΠΟΛΟΣ

ἄδιον, ὦ ποιμὴν, τὸ τεὸν μέλος ἢ τὸ καταχῆς
τῆν' ἀπὸ τᾶς πέτρας καταλείβεται ὑπόθεν ὕδωρ.
αἶ κα ταὶ Μοῖσαι τὰν οὔδα δῶρον ἄγωνται,
ἄρνα τὸ σακίταν λαψῆ γέρας· αἱ δὲ κ' ἄρέσκη
τήναις ἄρνα καβεῖν, τὸ δὲ τὰν οἶν ὕστερον ἄξῃ. (7→11)

汝が歌は、おお羊飼殿
ことのほか快く
夫（そ）はここかしこの水面に響き渡りて
夫は零落ちる
岩より
もし詩の女神、ともにお越しあそばせられ、
牝羊を汝に褒美として
乳離れし子羊を
また牧神が望まれるなら
牝牛を汝に。

πλῆρες τοι μέλιτος τὸ καιλὸν στόμα, Θύρσι, γένοιτο,
πλῆρες δὲ σχαδόνων, καὶ ἀπ' Αἰγίλω ἰσχάδα τρώγοις
ἀδείαν, τέττοιγος ἐπεὶ τύγα φέρτερον ἄδεις. (146→148)

なんと甘美なことば
テイルシスさま
蜜にあふるるおことば
蜜ぶさに満るる
アイギリアの甘いいちじくのように
蟬の美しき響きにも似て。

同じく六脚韻のドーリス方言の叙情詩に似せた暗喩的なウエルギリウスと比較したい

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi
siluestrem tenui musam meditarius aurea;
nos patriae finis et dulcia linquimus arua;
nos patriam fungimus; tu, Tityre, lentus in umbra,
formosam resonare doces Amaryllida ailuas.
O Meriboee, deus nobis haec otia fecit:
namque erit ille mihi semper deus; illius aram
saepe tener nostris ab ouilibus imbuet agnus.
Ille meas errare boues, ut cernis, et ipsum
ludere quae uellem calamo permisit agresti. (1→10)

テイテイルスさま

大きな山羊櫛（ブナ）の木陰に横になられ
葦笛で森の歌を奏でておられるあなた。
でも、わたしたちは故国をおわれています。
それなのにテイテイルスさまは木陰にやすらい
うつくしいアマリスの名をこだまに教えておられるのですね。
メリボエウスさま、
神がわたしたちにこのやすらぎを与えてくださったのです。
そういつも信じましょう。
わたしたち羊飼はふくよかな子羊を
わたしたちの神におさげしましょう。
ごらんのように、神が私たちの牡牛たちに
自由に草を食ませ、私の好きなひなびた葦笛で奏でさせていただきますから。

第6歌

ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ ΒΟΥΚΟΛΙΣΤΑΙ

ΔΑΜΟΙΤΑΣ ΚΑΙ ΔΑΦΝΙΣ

Δαμοίτας καὶ Δάφνης ὁ βουκόλος εἰς ἓνα χῶρον
τὰν ἀγέλαν ποκ' Ἄρατε, συνάγαγον· ἧς δ' ὄ μὲν αὐτῶν

πυρρός, ὃ δ' ἡμιγένειος· ἐπὶ κράναν δέ τιν' ἄμφω
ἔσδομενοι θέρεος μέσῳ ἄμαντι τοιάδ' ἄειδον.
πρῶτος δ' ἄρξατο Δάφνις, ἔπει καὶ πρῶτος ἔρισδεν. (VI 1→5)

在る日、群を共にして、牛飼いだモイタス・ダブニス、
黄金の髪、髭の壮年の美しく
泉に集い
ダブニスからはじめて
歌比べに興じられました。

Τόσσ' εἰπὼν τὸν Δάφνιν ὁ Δαμοίτας ἐφίλησε·
χῶ μὲν τῷ σύριγγ', ὃ δὲ τῷ καλὸν αὐλὸν ἔδωκεν.
αὐλεὶ Δαμοίτας, σύρισδε δὲ Δάφνις ὁ βούτας·
ὠρχεὺτ' ἐν μαλακᾷ ταὶ πόρτιες αὐτίκα ποια.
νίκη μὲν οὐδάλλος, ἀνήσαστοι δ' ἐγένοντο. (42→46)

だモイタスはそう歌うと、だブニスを抱擁され、
前者のパーン牧神の笛と、後者の美しい横笛とを置かれ
若き牝牛たちはやさしい芝の許にやすらぎ
ともに互角で勝利もなく
名人ともに和解されたのでした。

(ウエルギリウス第3歌)

Non nostrum inter uos tantas componere litis.
Et uitura tu dignus et hic, et quiquis amores
aut metuet dulcis aut experietur amaros.
Claudine iam riuos, pueri, sat prata biberunt.
(Bucolica 3 : 108→111)

わたしたちの
歌比べに甲乙など能わりしこと
そなたも、そなたも、若牛の報償に値します
みな、愛の甘美をおそれ、また苦しさをともにします

こどもたちよ、溝を締めてきてください
野は水をたっぷり吸い上げたから。

2. テオクリトス略歴

テオクリトスは、シラクサ（前 310～300 年）に生まれ、コス島で青春時代を過ごし、プトレマイオス 2 世の家庭教師ピレタスに師事。シラクサのヒエロン 2 世（16 歌ヒエロン頌歌：前 275～278 年に支配官として君臨）は保護せず、後、アレクサンドリアのプトレマイオス 2 世の許に仕官する。没年不詳。

3. テオクリトス作品概要

新鮮で純真さのなかに、紀元前 270 年（17 歌プトレマイオス二世頌歌 128 行の王妃アルシノエ没年）以降の作品の牧歌の枠の 1、4、5、6、10 及び 11 歌のほか、それ以前の作の 2、7、13、15 及び 16 歌の戯曲風の作品をふくめて、青春時代のコス島の植物の植生をかいまみられることから、シチリア及びコス島（第 7 歌収穫の歌）への追憶をフレーム・ワークとしています。第 1 歌のテイルシスの終曲の破局と、キュクロプスの終曲とは対蹠的です。ムーサイの助けがあれば、エロースに打ち勝つことができます。牧歌の愛の神と詩歌の役目をこれほどまでに劇的に仕上げたのはテオクリトスの神業というほかありません。ウエルギリウスにはこのような悲劇的恋愛は無く、昇華しています。テオクリトスにおける愛は、ときに泥くさく、愛憎が歴然としています。ムーサイをこれほど渴望した詩人は存在しません。テオクリトスにおける愛情は热烈的です。ウエルギリウスには、この熱情はみられません。もっと純化され泥くさが無くなっています。若い情熱がテオクリトスには漲っています。愛の苦しみに満ちています。詩歌の女神に救いを求め、より客観的に「愛」を「詩歌」によって純化しようとムーサイに訴えかけ、救いを希求しているのです。そこに、サッポールの恋愛詩の伝統がみられます。テオクリトスもサッポールと同様、恋愛に詩歌への昇華を求め、情念と葛藤したのです。

その葛藤の成果物が、その作品に結集したものというべきではないでしょうか。

それこそが、ブーコリカの創造の原点であったということが出来ます。

ウエルギリウスは、それを再制作し、牧歌として継承したのです。

第 1 歌：ΘΕΟΚΡΙΤΙΥ ΘΥΡΣΙΣ Η ΩΙΔΗ (テオクリトスのテイルシスもしくは

讃歌)

ἔνθ' ὄναξ, καὶ τάνδε φέρει πακτοῖο μελίπνου

おいでください主たる君、美しき牧神の笛を手に

蜜蝋の繊細な蜜のかおり、唇のめぐりに、ふれられて。

私は（ダブニスへの愛に溺れず）愛神に屈することなく黄泉の国へ！

終曲を詩神、牧歌を終わりに。（128→131）

第2歌：ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ ΦΑΡΜΑΚΕΥΤΡΙΑ（テオクリトスの女魔術師）

Πᾶ μοι ταὶ δάφναι; φέρε, Θεστυλί. πᾶ δὲ τὰ φίλτρα;

月桂樹は何処、媚薬は何処、テストリス様おもちあそばせられましたか？

紫色の牝羊の毛で、さかずきを飾りながら。

魔術を使いながらも、あの方はもう十二日間も私の許に戻らないわ。

私が死んでも生きていようとも気かけようとはなさらないわ。

憎き方、戸口を叩いてもくださらない。

きっと愛神様があの方の心を、アフロデイテイ様とともに、

ほかの女のひとに移してしまわれたのね。（1→7）

第3歌：ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ ΚΩΜΟΣ（セレナーデ）

Κωμάσδω ποτὶ τὰν Ἀμαρθλλίδα, ταὶ δέ μοι αἴγες

歌います：アマリリスさまを讃える歌を

牝山羊たちは今丘で草を食べています

テイテュロスさま、わたしの牝山羊を丘からつれてきてくださいませ。

わたしの大切なテイテュロスさま、

牝山羊に草を食ませて、ここの泉へ連れてきてください。

でも白いリビアの牝山羊に、お気をつけられて

角でつつかれないように。（1→5）

あなたの麗しい眼差し

美しい大理石のように、貴石のようなあなた。

黒き眉毛の乙女よ、あなたを愛する山羊飼いの私を抱擁してください

あなたの両の腕に、そしてあなたに口づけを、たとえむなしいキスでもよいの
です、私の甘い情熱。

あなたは、私のささげる花冠を、砕きつくし、粉微塵に頌歌に変えてしまわれ
る

いとしのアマリリス様、薔薇の蕾にセロリを絡まれキズタで編んだ花冠。

不幸な私、これほどの苦しさ

御聞き届けくださられないあなた。

草の衣を砕きさり、私は浜へ荒磯へ行きましょう

釣り師オルピス鮪をねらう荒磯に

私の命など、こころよきものと思う、あなたの許を去りて。(18→27)

¹ Ἀλγέω τὰν κεφαλάν, τὴν δ' οὐ μέλει, οὐκέτ' αἰδέω,

頭が痛む

でもあなたには分からない

もう歌うまじ

倒れ横たわり、狼の餌食とならむ吾。

それこそがあなたのお喉には蜂蜜の安らぎとならましかれ。(52→54)

第4歌

コリュドン：狼をしながら、みずうみの口にきてプシュコス（ロクリ・エピゼフィリイの人）の里に、ネアイトス川の岸辺に花咲くハリモクシュ（*melampyrum arvense*）、ノミヨケグサ（*erigeron viscosum*）、香り高きメリッサ草。(22→25)

第7歌：ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ ΘΑΛΥΣΙΑ（収穫の祭典）

¹ Ἦς χρόνος ἀνίκ' ἐγών τε καὶ Εὐκρίτος εἰς τὸν Ἄλεντα

エウクリストス様とともに、アミュンタス様を加え、コス島のハレイスの町に向かっていたときのこと、デメテル神のため、ブラシダス様とアンティゲネス様が収穫祭を催したのです。

お二人ともリュコペオスの子、クリュテイアとカルコンの後胤、古よりの高貴な血筋。カルコンが足と膝にて岩を押さえつけて湧き出させたプーリナの泉。

近くにポプラと榆の木々、快き木陰の鬱蒼と茂るは天井の覆いの如く緑なす青葉の裡に。(1→9)

第8歌：[ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ] ΒΟΥΚΟΛΙΑΣΤΑΙ <β'>

Δάφνιδι τῷ χαρίεντι συνάτετο βουκοκέοντι

牝羊に草を食ませて、山々を巡りておられるとの噂のメナルカス様

今出会いしは牛達に草を食ませておいでのダプニス様

黄金色の髪の二人同士、共に青春の若き齡
詩歌を詠み、パーンの笛の奏法をたしなまれて、
メナルカス様、ダブニスを看て歌いあげられた詩。(1→5)

ΔΑ. παντᾶ ἔαρ, παντᾶ δὲ νομοί, παντᾶ γάλακτος
ダブニス：そこかしこに春、牧場、豊かな乳房、
乳に溢れ、動物達は育まれ、良き子供らも歩み育つ
行かりなば、牝牛達に草を食ませる、喉の乾きし牝牛を連れる牧人よ。(42→
43, 48)

第 11 歌：ΘΕΟΚΡΙΤΟΥ ΚΥΚΛΟΥΣ：キュクロプス（恋の癒し）

Οὐδὲν ποττὸν ἔρωτα πεφύκει φάρμακον ἄλλο,
愛を癒すための薬など、つゆ御座いません、ニキアス様。
私はそう信じます。
塗り薬とて、粉薬とて、ムーサイ様を措いては。
ムーサイ様は、お癒しくださり、優しき手で。
されど、自らの許にあれど、見いだすことたやすからず。
さりながら、九人の女神に愛でられしあなたさまは、それをよく御存じのこと
私たちのキュクロプス様、心やすらかであらせられよ。
古のポリフェモス様も、こめかみの髭の豊かな頃、ガラテアを追いて愛したが。
(1→9)

Οὕτω τοι Πολύφομος ἐποίμαινεν τὸν ἔρωτα
かくのごとくポリフェモス様、恋いの悩みを歌いあげ牧場に戻られました。
黄金を医師に与える事無く、心満たされて。(80→81)

第 18 歌：ΕΛΕΝΗΣ ΕΠΙΘΑΛΛΑΜΟΣ（ヘレネ祝婚歌）

Χαίροις, ὦ νύμφα· χαίροις, εὐπένθερε γαμβρέ.
おしあわせに
良人をから得た花嫁様
おしあわせに
高貴な義父を得た花婿様
願わくは乳母の女神レト様、いい御子を授けてください。

アフロディテイよ、互いに助け合う愛をゆたかに与えてくださいませ
ゼウスよ、豊かさを授けてください
高貴な富を、それに相応しい新婚夫婦に渡してあげてください
手ずからに。
おやすみなさい。いつくしみと愛の息吹を交わしながら
御目覚めは、暁とともにありますように。
輝く翼の一番鳥が黎明を告げるころ、あしたに。
ハイメンよ、このすばらしき二人を祝福されまし。(49→58)

ΕΠΙΓΡΑΜΜΑΤΑ

XXVI

別れ別れになっていた牧歌の詩神たちは
今ここに同じ牧場のひとつの群れに纏まりました。

(ヘシオドス「仕事と日々」(ΕΡΓΑ ΚΑΙ ΗΜΕΡΑΙ) (581→596))

アザミが咲き、響き渡る蝉が木々にとまり妙なる歌をふるえる翅の許から溢れ出る、仕事に汗をながす夏来らば、山羊達はまるまる太りて、葡萄酒は豊饌になり、御婦人方も艶かになります、男達は疲れきってしまいます。シリウスがのぼり男達の頭や膝を焼き焦がし、肌も灼かれるからです。しかし、そんな日々には、木陰に涼を求め、ピプロス(トラキア産)の葡萄酒を味わい、捏粉を焼いたパンと、哺乳を終えた牝山羊の乳や、森で育ったまだ子を産んだことのない牝牛の肉、初子の山羊の肉などをおすすめします。胃が満たされたあとは、木陰に安らぎ、煌めく色の葡萄酒を味わいませ。ゼフィロスのそよ風に顔を向け涼みつつ。

夏も潤れない永遠(とわ)の泉から清水を汲み、三杯を冷水、四杯目を葡萄酒で満たして。

4. 結び

テオクリトスの創作した「牧歌」の世界は、現実でなく、仮想的理想化された田園歌であり、ギリシア音楽と密接な関連を有する抽象化世界です。のちにウエルギリウスがさらに理想化した理想郷「アルカディア」です。

しかし、背景は現実の世界の实在する風光であり、木陰であり、泉であり、ギリシアであり、マグナ=グラキアです。美しい現実の自然描写に「愛」の世界「理想郷」を創造したのです。

そして原型に、サッポアの詩集の愛と情景が在ります：

Ἦρος ἄγγελος ἰμπερόφωνος ἀήδων (Schol. Soph. *Electr.* 149) – LP 136 – (TR131)

春を告げ知らせる者よ

夜鳴きうぐいすよ愛の声で

περύγων δ' ὑποκακχεί ληθρὰν αἰδαν ὅ τι ποτ'

ἄν φλόγιον καθέταν ἐπιπτάμενον καταυδεῖη

(Demetr. π. ἐρμ. 142 – TR 206 – (LP Alc. 347b))

蝉よ 翅の許に 鋭き歌歌いぬ

落つる焰が 告げる時に。

ποικίλλεται μὲν γαῖα πολυστέφανος

(Demetr. π. ἐρμ. 164 – TR 148)

大地を花々の数多なる冠に色とりどりに飾られて...

テオクリトスはサッポアの詩歌の愛と自然描写を受け継ぎ、ヘシオドスの農耕歌と韻律を受け継ぎ、継承しています。

テオクリトスが初めて創造した「やすらぎの田園の場所 (locus amoenus)」は、ウエルギリウスにおいてアルカディアとなり、理想郷化され、観念化されました。

そこが「アルカディアに生きる」という、自然の豊かさを味わい農作物の豊かさ(デメテル神)の恵みを享受するという、エピキュロス哲学的なつましい快い生きかたに結実します。

私達は、心のなかの「アルカディア」をつねに生きていなければならない。現実の富や地位を求めず、理想郷的田園のなかに精神世界を構築せねばならない。

それが、ボイオテアの農民詩人ヘシオドス「仕事と日々」の「田園の真実」の記録とウエルギリウスの継承した「農耕歌」の精神に通じるものです。

自らの詩作とそれを支える勤労が基底に厳存するのです。

そういう自己の経歴と困難(16歌106~107)を乗り越えて詩人達は「牧歌」の理想郷を創造したのです。実直な農耕の精神と牧歌的理想は両立します(ヘシオドス「仕事と日々」(ΕΡΓΑ ΚΑΙ Η ΜΕΡΑΙ 581→596)参照。)

参考文献

テキスト：

Gow A. S. F. *Theocritus*. 2nd ed. Cambridge. OUP (1952)

Mazon Paul: *Hésiode: Théogonie, Les travaux et les jours, Le bouclier*.
Paris: Les belles Lettres (1928)

翻訳：

テオクリトス「牧歌」第1～3歌：横浜：八木橋正雄訳 1981

テオクリトス「牧歌」第4～7歌：横浜：八木橋正雄訳 1981

テオクリトス「エイデュリオン」第8～14歌：横浜：八木橋正雄訳 1981

テオクリトス「エイデュリオン」第15～30歌：横浜：八木橋正雄訳 1985

ウエルギリウス「牧歌：農耕歌」：横浜：八木橋正雄訳 1980

ヘシオドス「仕事と日々」：横浜：八木橋正雄訳 1987

ロンゴス「ダプニスとクロエ」：横浜：八木橋正雄訳 1988

サッポー「サッフォー詩集—対訳」：横浜：八木橋正雄訳 1980

Yagihashi, Masao: *Gendai Girishago no Kiso*, Tokyo, Daigaku Shorin (1984)

Yagihashi, Masao: *Gendai Girishago, Kypurosuhogen no Kenkyu*,
Yokohama, Chez l'auteur (1984)

Yagihashi, Masao: «Gendai Girishago, Kypurosuhogen no Outline (1)»,
Hiroshima, Japan Society of Greek Linguistics and Literature: ΠΡΟΠΥ-
ΛΑΙΑ, 4, pp.49–55 (1992).

Yagihashi, Masao: «Gendai Girishago, Kypurosuhogen no Outline (2)»,
Hiroshima, Japan Society of Greek Linguistics and Literature: ΠΡΟΠΥ-
ΛΑΙΑ, 11, pp.40–46 (1999).

Yagihashi, Masao: «Girisha no Hogen», Tokyo, Taishukan: Gengo, vol 33,
no.7 pp.60–65 (2004).